

福島県浪江町ボランティア報告

2012年5月22日(火)、23日(水)に、福島県浪江町から避難されている方々に、歯科医療と物資の支援を行ってまいりました。

これからも、私たちフィリピン医療を支える会「ハローアルソン！」(通称:ハロアル)は、フィリピンの恵まれない子ども達の支援と共に、今回の東北地方関東沖大地震の被災者に、各方面での支援ご協力を続けていきたいと思えます。

活動場所

福島市飯坂町浪江町仮設住宅(北幹線第一応急仮設住宅)

福島市飯坂町平野字早川原川 201-1
174戸、397人居住

治療人数・・・男性9名、女性6名の合計15名

福島市森合町応急仮設住宅

福島市森合町 109-1
16戸、34人居住

治療人数・・・男性5名、女性13名の合計18名

治療班と物資班に別れて活動しました。

また、患者さんに協力してもらったタオル180枚、カンパ15万円、お米180キログラムを仮設住宅の皆さんにお届けしました。

活動日程

2012年5月22日(火)、23日(水)

参加メンバー

歯科医師・・・5名
歯科衛生士・・・10名
歯科技工士・・・2名
診療所のスタッフ・・・5名
学習塾経営者・・・1名
会社員・・・1名
総勢・・・24人

1. はじめに

ハローアルソン・フィリピン医療ボランティアが4月に行っている恒例の報告会は、あいにくの雨でしたが、350名を越えるお客さんを迎えることができ、大盛況のうちに終わることができました。

いつものことながら参加された皆さんは高校生の発表に感動されたようです。

もしも参加しなかったらこういう感動は得られなかったのではないのでしょうか。そしてチケットを無理矢理押し付けられるようで「嫌だな」と思われたかもしれませんが、無理矢理でも買わせてくれた人がいなかったら、やはり感動をすることも、こういう活動があることもわからなかったと思います。

こういうことを仏教では「信(しん)」・「行(ぎょう)」・「解(げ)」と言います。

人の言うことを信じてやってみると理解できるということです。

しかし誰にでも素直に出来るわけではありません。

それはその人の常識というものが邪魔をするからです。その中で信じてやってくれた人だけがもらえる「ご褒美」なのです。やってもやらなくても大した違いではないかもしれませんがそれを一(ひと)月、一年(いちねん)、二(に)年と続けて言ったらどうでしょうか……。大きな違いになると思います。

話を報告会に戻しましょう。

いまどきの高校生ですから誰もかれもそんなに違うわけありませんが、この活動に参加した高校生は明らかに大きな違いになっていきます。

フィリピンの恵まれない人の生活に触れるうちに、いつの間にか自分の心が洗い清められ、心から人を思う気持ちにさせられるのだと思います。自分をこの世に産んでくれた親への感謝、忘れていた自分の環境に感謝することを思い起こされ、人に尽くすことの素晴らしさを表現できたのだと思います。

自分が知っている「知識」が実際にこの経験を通して「智慧(ちえ)」に変わったのだと言えるでしょう。仏教で言う真髓の智慧(ちえ)と慈悲(じひ)が分かったのだと思います。

だからこそ350名の参加者を感動の渦(うず)に引き込むような発表が出来たのではないのでしょうか……。

この高校生が参加するためには、地域の皆さんからの資金カンパがなければ出来ません。

そのカンパですが皆さんが全て気持ちよく協力してくれるわけではありません。中には「フィリピンに行ってボランティアするなら日本にだって大変な人がいるのだからそちらをやったらいいのに」とハッキリいう人もいます。

その通りです。身近にやらなければならないことがあればそれをやるべきです。

しかし日本には「憲法」があり、その中で「日本人は文化的で最低限度の生活を保障」されています。ですから私達のような小さな団体がボランティアをするまでもなく、「社会保障」として「基本的人権」を「国」が責任を持って守ってくれているのです。その一つが今大きな問題になっている「生活保護」です。身内の誰も経済的な援助をしてくれなければ一カ月8万円の援助が受けられます。その他に住居費ももらえるのですから本当に弱い立場の人が路頭に迷うようなことはありません。

国によってはそんな保障がない国があります。その一つがフィリピンです。社会保障がしっかり整備されている国とそうでない国のどちらを優先させることがいいことなのか誰が考えても明らかです。中東の難民に対しても理由にかかわらず様々な国が物資や食糧の支援をしていることも全く同じ理由です。

この様に、ボランティアは国がやろうが団体がやろうが困っている人を救済する活動なわけで、国内を優先しなければならないというものではありません。求められたところで自分たちが出来ることをしたらいいのではないのでしょうか・・・。

そういう意味合いからも、フィリピン医療ボランティアでは「チョイボラ」と言っていますが「どんな小さなことでも出来ることをしていきましょう」という心意気(こころいき)でやっています。

そしてこの活動には大きな4本の柱があります。

第一にフィリピンに行って恵まれない人に無料の医療ボランティアをする。
第二にそこで使う物資の支援を地域の皆さまにお願いする。
第三にこの活動を通して日本人のやさしさや思いやりを思い起こしてもらう。
そして第四にこの活動を大人の私たちだけでなく高校生にも参加してもらい真の国際協力の在り方を考えてもらうことです。

本会では多くの皆さんからもご提言いただいているように、今回の震災にも精一杯応援させてもらっています。

大震災の発生直後の2011年3月15日には長野県のSBCテレビを通じて50万円、レインボータウンFMを通じて20万円、そのほかに80万円を被災地に届けさせてもらいました。ハブラシ5万本、マスク1万2千枚、タオル3000枚を軽井沢青年会議所を通して提供しました。

また、2011年3月21日には団長の関口敬人先生、今西祐介先生、加藤正雄先生が宮城県の南三陸町に入り歯科医療ボランティアをしてきました。

ですから皆さんに「日本でもやることがあるではないか」と言われますが、そこもしっかりやらせてもらっています。その上で今回の福島ボランティアを計画しました。

2. なぜ今、歯科医療ボランティアか

では「いま、なぜ歯科医療ボランティアか」ということです。

あの大きな被害を受けた皆さんが家族の所在がわからなかったり、自分の家が全壊して悲しみに暮れている時、「歯の痛み」や「入れ歯の不調」を言うでしょうか……。

そんなことはありません。夢中になって家族を捜し、壊れた家の片づけが終りほっとした今、ようやく自分の悩みが出てくるのではないかと思います。

案の定、福島の仮設住宅に行ってみるとそういう人がいっぱいいました。準備をしている時にスタッフが「患者さんが一人もいないのではないだろうか……2, 3人しかいなかったらどうしようか……」と知らない心配をしていました。

私は「いなかったら」他のことをさせてもらえばいいのではないかということと、いないということはこちらに住んでいる人が幸せだということだから、むしろそのほうがいいのだということを書いて聞かせました。

しかし逆に多かったら医薬品や入れ歯を作る材料が不足するので、余ってもいいから多い目に持っていくように準備させました。

その甲斐があって歯科治療班の方は順調にボランティアが出来ました。

それではその内容について触れておきます。

3. 福島市飯坂町仮設住宅（北幹線第一応急仮設住宅）の治療（1日目）

今回参加したメンバーは歯科医師5名、歯科衛生士10名、歯科技工士2名、診療所のスタッフ5名、学習塾経営者1名、会社員1名の総勢24人でした。

治療班と物資班に別れて活動しました。

計画をするにあたって福島県浪江町の“がんばろう！なみえ復興ボランティアセンター”に電話をして計画を練っていただきました。

当初は歯科治療と物資の仕分けボランティアと言うことでした。

ボランティアに行くのは一番人手が足りなくなる平日がいいだろうと言うことで、火曜日と水曜

日に決めました。私達にとっては土曜、日曜がいいのですが他の人も集まりやすいので避けた方が地元の皆さんにとっていいだろうと言うことで5月22, 23日にしました。

一行は午前4時に長野県の林歯科診療所に、ア歯科グループと林歯科グループが合流し、マイクロバスに乗って出発しました。日が長くなったと言ってももうず暗い内の出発でした。

バスの運転はいつものことながら林歯科の患者さんの齊藤さんがしてくれ、一行は心から安心できる運転に身を任せられました。藤岡のインターで群馬県の吉井歯科診療所のチームが合流し一路福島に向かいました。

途中の高速道はあちらこちらで修理をしており、去年の3.11大震災の影響がいかに大きかったのかわかりました。途中の那須塩原サービスエリアでせきぐち歯科グループと合流、道路を修理しているところでは多少の渋滞はありましたが順調に目的地に行くことが出来ました。

福島市に入ると震災がなかったかのようなぎわいで、一瞬自分たちが何をしにきたのか迷うほどでした。ほどなく、目的の仮設住宅に到着しました。

警察署の真横にある小雨に煙る仮設住宅は殺風景で、ここに人が住んでいるようにはとても思えません。

この仮設住宅は飯坂町にあります。現在の入居者数は174世帯ですが昨日も一世帯入居してきたそうです。満員で190世帯あり多少のゆとりはあるようです。見た目には比較的立派な建物でした。アパートに出ていく人入ってくる人でいつも動きがあるそうです。

入居者は全て原発の事故による放射能被害で避難してきた人です。

東京電力から1人1カ月10万円の援助を受けていますが働くことは一切できません。ほとんどが高齢者ばかりで、2世帯に子供が2人いるだけです。

出会う人ほとんどが高齢者ですから異様な気持ちになります。

たまにマスコミの取材がありますが、仮設住宅の皆さんの言いたいことを聞いてくれるどころか、マスコミの思うような答えばかりを期待しているようでストレスがたまっているようでした。

「仮設住宅は大変ですか」と必ずみんなが聞くそうです。4畳半、二間に押し込められて大変に決まっているではないですか。聞く前からわかっています。

浪江では農家だったから大きな家に住んでいたし、野菜は自分で作っていたので金がかかりません。肉や魚は買っていたのでお金を出してもいいけれども野菜も自分で買えと言うが殺生(せっしょう)だと嘆(なげ)いていました。

これも10万円の中で水道、光熱費、ガス代と共に払わなければならないそうです。

そしてここで一日中、何もしないでぶらぶらしていると言うのです。自分たちの気持ちを分かっ

てもらえない不満が募っていました。

この日、この仮設住宅にプランターの花が届けられ分配をする予定になっていたようですが、これとて一軒に一つですから、植木が一本もないここを飾るにはとても少なすぎます。

私達は9時に現地に到着の予定で来ましたが、途中で道に迷い予定時間を20分過ぎてしまいました。ボランティアといえどもこういう悩みを持っている皆さんのことを考えると申し訳なく、反省させられました。

小雨交じりの中、集会場前に仮設住宅の自治会長さんはじめ数名の役員さんが待っていてくれ、集会場を仮設診療所に提供してくれました。バスに積んできた診療道具を全員で下し、机に並べて準備を始めました。普段、歯科訪問診療でスタッフがやっていることや、フィリピン医療ボランティアでやっていることが生かされ手際よく準備出来ました。

準備が出来る前に患者さんが来てくれ、スタッフが心配していた「患者さんがいなかったらどうしよう」という心配は無くなりました。

ここで物資班の5名はボランティアセンターに移動しましたが、約束の時間を過ぎたこともあったのかどうかわかりませんが、ここで物資班はトマトの苗を植える農業班に変わったようです。雨の中のボランティアでさぞかし大変だったろうと思います。本当にご苦労様でした。皆さんの努力はきっとおいしいトマトに育ってくれると思います。

この日、治療をしたのは男性9名、女性6名の合計15名、義歯修理が10名、義歯新製4床、レジン充填が1名、スケーリングが4名。

ここでの治療が終了したところで、全員で後片づけをして福島駅前にある宿に移動しました。この宿も“がんばろう！なみえ復興ボランティアセンター”の皆さんの紹介で決めました。せっかくボランティアに行くのですから、少しでも被災地の皆さんの協力になるようにここを使わせてもらいました。

長旅と慣れない土地でのボランティアでしたから一行はさぞかし疲れたと思いますが、朝早くからこの宿泊地まで運転をしてくれた斉藤さんには心からの感謝をしたいと思います。

4. 福島県森合町応急仮設住宅の治療（2日目）

二日目は森合町にある仮設住宅でした。

宿泊先から近くにあることもあってここは喧騒(けんそう)の中の仮設住宅でした。それなのにこの仮設住宅に子供は一人もおらず、子供たちの明るい元気な声を全く聞くことが出来ません。子供たちはほとんどが放射能の心配のない県外に行ってしまったそうなのです。

仮設住宅の前の道路で高校生の交わすたわいもない大きな笑い声、そして車の行きかう騒音どれ

もこれも皆さんにとっては心に突き刺さるような苦々(にがにが)しいことだろうと思えました。

一般の人にとって3.11は遠い過去のことかもしれませんが仮設住宅の人にとっては現在も進行中なのです。

森合町の仮設住宅に到着するとすぐに集会場で待っていてくれたこの自治会長さんの松田さんが挨拶に来てくれ集会場を診療所に見立てて準備を進めました。

農業班は昨日のこともあって人員を12人に増やしました。その分診療の方は少なくなり12名になってしまいました。ここでも事前の連絡がよかったせいで準備が出来る前から患者さんが来てくれました。

男性5名、女性13名の合計18名、義歯修理10名、義歯新製3床、レジン充填2名、スケーリング8名、咬合の不一致による咬合調整が1名でした。

この患者さんは治療室に入ってきたときは顎を抑えたり、こすったり落ち着かない素振りでしたが長谷川先生に咬合調整をしてもらおうと何度か空(から)咬(か)みしながらうれしそうな顔をして「楽になった」と話している姿がとても印象に残りました。

ここでは身体的に大変な患者さんもいました。左手が肘(ひじ)からないために不自由で義歯の清掃も管理も大変だったと思います。その上反対咬合で入れ歯は安定しないで往生(おうじょう)しました。

もう一人入れ歯を全く使用したことのない男性がいてこの患者さんは入れ歯の型を取り、模型を作ってから、入れ歯を完成しましたから技工士の小林、田端先生は大変だったと思います。

しかし不思議なことにこうした状況の中で仕事をしているにも関わらず、何のトラブルもなく完全に仕上がる不思議に今回も出会うことが出来ました。

一念(いちねん)込めてやるボランティアには大きな力が注がれているのだと思います。

この診療を通して歯科衛生士の皆さんと歯科技工士の皆さんそして歯科医師の皆さんが心をこめて治療に当たってくれたことが大きな力となったことは間違いありません。

これからも機会を作って東北の皆さんの支援に行きたいと思っています。

この日のボランティアが終わったところで、患者さんに協力してもらったタオル180枚、カンパ15万円、お米180キログラムを仮設住宅の皆さんに届けさせてもらいました。

心から喜んでいたことを申し添えておきます。

5. 終わりに

昨年の3.11大震災は直接の被害を受けられた皆さんだけでなく私達国民に大きな痛みをもたらしました。

その直後に起きた福島原発事故による被害も甚大(じんだい)なものでした。

私達は今回、福島県にある浪江町の皆さんが避難している二つの仮設住宅に医療ボランティアに行ってきました。

仮設住宅は倉庫のような佇(たたず)まいでとても人が住んでいるとは思えないものでした。まるで悪いことをした人が押し込められているような所をイメージするものでした。

4畳半、二間「こんな所にいたら死んでしまう」というのが私の率直な思いでした。

私は普段から高齢者の家や施設に出かけ診療をしていますから様々な高齢者、住宅を見てきました。暖房が全く入っていないのではないかと思うような寒々とした家のこたつに背中を丸めてかがみこんでいる高齢者を見るとかわいそうで私が引きとってやろうかなと思うこともあります。そこでも生活の匂いはあります。それより悪い印象でした。

仮設住宅に住んでいる皆さんは笑顔で明るく振舞(ふるま)っていますが話が途切れた時、何とも言えない淋しい顔になります。ともかくよくしゃべります。

話が途切(とぎ)れると「淋しさ」や「やるせなさ」に襲われるから話し続けるのだと思います。

中には、お昼に南相馬の小高町を出て原町に移動、そこで一晩泊まっていたところさらに避難指示で飯館の避難所に3日、ここでガソリンが尽きてしまい県庁で世話をしてもらい、福島高校の避難所に4月10日に入りました。しかしここで避難生活が終わったわけではなく、そこから福島にある猪苗代湖リゾートホテルに移動、4月10日から7月9日までここで避難生活をしましたが、そこもまた移動になり、同日の内に福島市内の森合町の仮設住宅に移動して現在に至っています。

浪江町に住んでいた時は畑に出たり田んぼに行ったり一年中忙しく体を動かしていたのです。そしてその実りを3食食べる事が出来ました。それがある日急に避難生活に変わりいつまで続くかわからない放浪生活に変わってしまいました。

まるで何も悪いことをしたわけでもないのにトラックが飛び込んできて危ないからすぐ退去しなさい、と持つものも持たないで追い出されたようなものです。

この先どうなるかわからないまま10万円だけ渡され「これで生活しなさい」、と言われているのです。

「ふざけるな！」と怒鳴りたくなるのではないのでしょうか。それが普通だと思います。それではこの仮設住宅にいる皆さんにはそういうことを言うてはいけないという縛りがあるのでしょうか……。ないと思います。

それなのによく我慢をしていると思います。それは一向に仮設住宅の皆さんの思いをかなえてくれない政府と事故を起こした東京電力がしっかり保障をしてくれないせいです。

そしてこの仮設住宅にいる人はそのうちに「うつ病」になるか、「死」を選ぶのではないかと思いました。まさかそれが数日後に現実のものになるとは夢にも思いませんでした。

家に帰りたくても、畑に出たくても出られません。
自分のものがあってもなくても同じです。

酒ばかり飲んでいるという人がいましたが、酒でも飲むほかにやるせなさを発散できなくても仕方ないように感じました。

悲しい現実ですが、「一つの救いは町民全員が同じ宿命に流されていたこと」なのかもしれません。運命(うんめい)と言うには余りにも悲しい運命です。

それから二日後でした。被害者であるにもかかわらず、自分の家に帰るのに許可をもらって浪江町に帰った人がいました。このことだけでも苦痛だったと思います。そして懐かしの我が家に辿(たど)りついてみると大震災の後片付けもしないまま留守にして1年以上経つのですから見るも無残(むざん)な状態だったろうと思います。余りにも悲惨(ひさん)な現実と今までとられてきた政府や東京電力のやり方に「生きる望み」を持てなかったのだと思います。62歳の男性はそこで自らの命を断(た)ちました。

ようやくたどり着いたこの仮設住宅も安住の地ではなく、いつ出ていかなければならない不安と自分の家がありながら放射能の影響で帰ることが出来ないもどかしさの中であえいでいる人がまだまだ沢山います。

私達もここへきて始めて知ることばかりでした。

そして4畳半二間の家に押し込められて仕事をすることも出来ず頑張っている人がいることを知りました。

同じ国籍を持つ仲間の一人としてこの人たちが1日も早く自分の家に帰れる日が来ることを願わずにはおられません。

以上